

ありがとうの魔法

小牧市立北里中学校 2年

私はいつも笑顔で「ありがとう」という言葉を意識して使うようにしている。それはあることがきっかけだった。

私が小学一年生の時に、突然弟が病気になり入院した。難病だった。弟は何か月もの間遠くの病院で過ごし、母がずっと付きそっていた。すぐに行ける距離ではなく、家から車で2時間もかかる病院だった。退院したと思えばまたすぐ入院し、弟は入退院をくりかえしていた。体調が良い日は家に帰ってくることができ、家族全員でご飯を食べることができた。それがすごくうれしかった。次の日には病院へ戻ってしまうけれど、その日の夜は母と弟と一緒に眠ることができた。それもすごくうれしかった。

弟は食べたい物を満腹に食べることができなくなった。免疫抑制剤を飲んでいるため、体力もなく、激しい運動をすることも難しくなったのだ。そんな中、病気ではない私は食べられる物がたくさんあり、運動も不自由なくできる。それは私にとって日々あたりまえのことだ。弟が病気になったことで、何でも食べられることや楽しく運動ができることがあたりまえではなく、ありがたいことなのだと気付くことができた。

以前誰かに「ありがとう」は「有り難う」と書くだよと言われたことがある。私は日本語が大好きでよく国語辞典を眺めている。調べてみたら、本当に「有り難う」と書いてあった。「ありがとう」という言葉になぜネガティブな「難」という文字をあてはめたのか。意味を知りたくてワクワクしながら国語辞典をめくったが、国語辞典にはのっていない。学校のタブレットで調べてみることにした。そこには、『何かしてもらうことはめったにないことで、「有ることが難しい。」つまり、「有り難い」こと。だから「難」があてられている』とあった。では、有ることが難しいとはなんなのか。それは壁にぶちあたって必死にがんばってしがみついて乗り越え、成長することで、「有り難い」が得られるのだと考えた。それは文字通り難しいことだと思った。私は「あたりまえ」というのは「有り難い」ことなのだと気付いた時から、与えられたことに感謝し、時間を大切にするようになった。

今日も朝元気に起きることができた。朝ご飯が用意されている。「おはよう」「行ってきます」と言える。見送ってもらうことができる。横断歩道で車が止まってくれた。近所の人が声をかけてくれた。朝起きて学校に行くまでの間だけでも、たくさんの「有り難う」があった。勉強する場所がある。大好きな給食を食べることができる。思いっきり体を動かすことができ、はげましてくれる部活の仲間や先生がいる。「有り難う。」

「ありがとう」はその行動に理由をつけて意味のあるものに変える。例えば、何気なく洗濯物を畳んで、家族に「ありがとう」と言われたとする。この時、何気ないことでも、感謝されて自分がやったことが意味のあるものになる。「有り難い」「幸せだ」と感じてそれを伝えれば、みんな明るくなると私は思う。人は幸せに慣れてしまい「有り難い」を忘れてしまう。いつものルーティーンの中には「有り難う」がたくさんあるのに、良くも悪くも人はその有り難さを忘れてしまう。皆「あたりまえ」の中にある、たくさんの「有り難う」に気づかないで生活しているのだ。

弟は今現在も入退院をくりかえしている。でも今は幼い頃と違い、「自律」している。「自立」ではなく心の「自律」だ。食べる物も運動も長期入院していた頃とほとんど変わらない制限がある。それでも弟は幼い頃よりも強くなり、楽しそうに生活している。

私は弟のように強くなりたい。祖父、祖母のようになんでも許せる優しさがある人になりたい。父のように冷静に判断できる人になりたい。母のようにいつでも機嫌よく笑っている人になりたい。友達を大切にすることができる人になりたい。そして私の人生、自分自身を大切に一生懸命生きていきたい。心が辛い時は少し笑ってみる。そうすれば、ちょっとだけ元気になる。だから、私は意識して笑顔で、「ありがとう」を言っている。まだ、私が気づいていないだけで様々な「ありがとう」がある。出会っていないたくさんの人や知らないこともある。私を支えてくれる全ての人達へ、そしてこの恵まれた環境へ感謝を忘れない。